

藤井高尚書簡集(二)

飯田正一

九 文政六年十二月廿日付

今年之寒威至而烈候処、御清栄被成御坐候や。」

老拙事も衰老故凌兼申候。浪華々申上候通、」

忝但馬守病氣ニ而、節季年始公私共用事」

差支候趣申来候而、去月十三日帰郷、倅久き」

病氣ニ而、打捨御坐候用事ヲ始、同人療養之事」

彼是多忙、繁雜難申述候。漸々取仕廻候而」

先貴家之御疑問ニ懸り、今日迄ニ終リ申候。」

京飛脚出切り不申内と急き候へ共、いかゞニ哉、」

岡山へ為持遣し候上ならでハ難相知候。若飛脚」

無之候へば、早春ノ事ニ相成申候。

一『源氏』之御説、面白事多御坐候。尤宜き分は」

何とも不書候。御難有之候所も、子細ヲ皆書記し」

兼而遅々ニ及候事、御憤ニ候へ共、得と御考も」

可被下、善と申も惡と申て愚案ヲ出し候も、」

一筆書候事皆板ニ成候而、天下後世ニ伝事ニ而」

不等閑候事故、浪華逗留之混雜中忤ニは」

出来候事ニて無之、遅々ニ及候也。前後ヲ」

見渡して考候上ならでハ、決し不申候故也。」

等閑ニ早く見廻して、御説ヲよし／＼とのミ」

申候て、当時之御受、御憤リハ無之候へ共、」

天下後世ニ御恥辱ヲ御残し被成候は、万世の」

御瑕瑾ならずや。

一わかなの巻ノ御考、于殊すぐれて感心、」

御出来宜候也。

一八月ニ大坂江下リ候時ニ、逗留中ニ此一冊は」

済し候心得にて、此所などハ『湖月抄』ヲ京々持」

申候事ニ御坐候処、案外ニ浪華繁昌ニ而、」

会も五ヶ所ニいたし、人類百余も取扱候事ニ而、」

一寸一步之暇もなく、此一冊のミ持来候事も」

わすれ候而、皆持候様ニ覚候処、昨今考候へハ」

右の如くなりき。此余も京ニ置書物類と」

一緒ニつづらニ入れ、あひすや蔵へ封印にて預け候」

その中ニ御さ候。左候へば、此次ハ二月ニ上京、

彼地ニて拝見御返し可申候。初年と違、

来春ハ事も少くと存申候。春夏中ニハ、

是非かた付ケ可申候。

右条々申上度、如此御坐候。来二月ニは京に出候へハ、

春ニ成而之御状は、京迄之御便リニ可被成候。」

行違候而は不宜候也。頓首

十二月廿日

松 斎

清水君

〈申正月十三日着〉

此状うえ封しハ城戸氏」

当テ大急用として岡山へ」

為持遣申候。京大坂双方之」

飛脚宿へ為掛合候也。」

尾張名護屋納屋町

清水太左衛門様

急要用

藤井長門守

此状實岡山迄は払出ス。夫々京迄之實、

大坂迄も岡山渡ニ成候や。九デ京弘ニ成、

岡山へ為持遣し候上ならでハ、此節ノ飛脚、

城戸氏ハ追可被申上候。

一〇 文政七年三月十九日付

略御意

時候不順風邪流行之處、弥御清栄」

被成御起居候哉。承度奉存候。」

一去十二月七日之貴書相達、奉拝見候。」

歳晚為御賀儀、方金百疋被贈下、不浅」

奉謝候。乍然、此方ハ御世話申上候事も、

怠候成行ニ而、大ニ恐入候。

一二月八日之貴書も、去十二月之と共に、此」

三月中旬上京致、城戸ハ受取拝見。」

此御状中ニ、在京之由御聞被成候は間違。」

国許ニ種々取込故、障共御坐候而、都ノ花ニ」

おくれ、三月中旬ニ京着いたし申候。且」

忝但馬守病氣、今以本快ニ不至候故ニ、此度」

為医療つれ参り、今月中ニは取仕廻、

京を引取申候。忝病身ニ成候ニ付而は、

老拙在京難出来、鐙舎ノ人々にも断候而、

引取申候。纔之逗留故せハしく御坐候也。」

隔夕ニ、『源氏』兩夜物語講釈いたし申候。此度を」

京地ニ而講席之とちめと心得申候。もハヤ」

老衰、多之人應對難出来、且在京ニ而ハ何之」

暇も無之、貴家之御疑問も怠候通ニ、諸國之」

人々江は不沙汰と成、近國のものニハ被招、

甚不宜候故、忝病氣ヲ申立ニ、一向ニ引取」

申候趣ニいたし、安心仕候。左様思召可被下候。」

一浪華²春門が『源氏』之注釈など申は、
虚言と存候。同人一向之不学、いかでか

ものゝ注釈ヲ可書出。うはべヲかざり候男故、
ロニは左様之事も申なるべし。利口ものニ而
御坐候へば、注釈を書出候て、人ニ被笑候事は
いたし申間敷、唯口先ニて学者めける事

申耳也。浪華ニ而は、尾崎春蔵殿も

学問も抜群ニ御さ候。

右条々略御意如此御坐候。恐々頓首

三月十九日

清水君

〈申三月下旬着〉

尾張名護屋納屋町

清水太左衛門様

在京

藤井長門守

ちん先私

奉復急用

一一 「文政七年」八月朔日付

六月十三日之貴書相達候処、老拙義同日々

発病危篤ニ至候位之義ニ而、倅高豊ニ、御報

申上候様ニと申聞候、其覚候。如何不行届候義と

奉存候。老人之義、八十日近成候へ共、今以褥上、

臥しつ起つと申容躰ニ而御坐候へ共、余リニ

諸方へ御無沙汰ニ成候故、両三日机ニ寄候而、筆硯

取扱始候ニ付、先貴君に御意可申上と、

『添櫛』一覽、此二冊愚存加へ御返し申候。」

『源語』之分、是ニ而済候哉。昨今年ハ京撰に
出入、書類ものニ入交り、知れ兼候出来候故、
無覚束奉存候。此度之御疑問は、追而御意、
可申上候。

一秋冷相催候。弥御清栄被成御坐候哉。中元

為御賀儀、方金百疋被贈下、奉感謝候。」

此方々は、万事怠恐入候。

一御旧詠之中可然と思召候分、四季恋雜

ニて合二十首、御書抜御越可被下候。此度

『松乃屋哥集』撰し、板行之積リニて、附卷

一冊添候而、御得意中之御哥少々、出し候

様ニと、書林も相願候義ニて、申上候。是ハ大坂

書林企候事ニ而、千楯は懸り合無之候。」

一九月ニ野 御幸御坐候由、御上京可

被成条、御尤ニ奉存候。老拙病後ニて無

覚束候。頓首

松 斎

八月晦日

清水君

別陳

京撰に出候へば、御地との里数近、飛脚便等諸事

勝手宜と存候処、夫は宜候へ共、大都会〔に〕出候而は、

昼夜之人恋戀り候而雅事用多相成候而、御意」

可申事も手合兼候而、却而不宜、于殊老人」

精力薄成候而、多之人交り疲勞いたし出来」

不申、忤高豊ハ漸々本快ニ成候ヘ共、もはや」

京撰に出候志も退候処、今年之大病ニ而」

氣力大ニ衰、竹の庵ニ引籠り、時々ニ」

雞頭樹園へ出候を衆と申位ニ決定仕候。」

御聞置可被下候。左候へば、却而御筆談等は、」

無怠行届可申と奉存候。

高尚

一二 文政八年四月廿四日付

浪華江暫時□散ニ出候ニ出候ニ付、從此地」

呈一書候。故但馬守高豊病死ニ付、」

為御吊慰責書被下、奉感謝候。六旬過一」

子ニ別候事ニ而、悲歎無限候。右不幸後、」

氣分不快、為保養此地へ出候事ニ而、」

唯慰歩行のミニ而、教授等もさのみ」

いたし不申候儀ニ御坐候。 頓首

四月廿四日

松 斎

清水君

〈酉五月〉

清水太左衛門様

藤井長門守

京迄は賁済

一三 文政八年十二月八日付

御状相達、忝奉拝見候。寒威烈候処、」

弥御壮榮奉賀候。老拙義此寒ニは」

大ニ困り弱り、宿病種々起り合、平臥」

かちニ御ざ候。老衰病身故ニ御ざ候。無存掛」

鈴木主^ノ御書通、御著述『言語四種論』

被贈下、不浅奉謝候。病中乍臥と申位ニ而、」

略書は出し候ヘ共、貴君^ノ呉々も宜様、」

御厚情ヲ御謝し可被下候。若州ノ妙玄寺^ノ

兼々御様子は承候事也。 頓首

十二月八日

〈酉極月廿六日着〉

尾張名護屋納屋町

備中宮内

清水太左衛門様

藤井長門守

ちん京迄ハ済夫^ノ先私 奉復要用

一四 文政九年七月廿五日付

六月中旬之御状昨日相達拝見、今日御返書」

認、幸ニ大坂江便義御坐候而、城戸下向差出し候。」

今年は例外之炎熱、老人大ニ衰弱、御憐」

尾張名護屋納屋町

従大坂発

察可被下候。御老人様御病氣之御由、御心配」

奉遠察候。一ヶ月余も過候へば、其後之御様子」

如何と大ニ御案し申上候。秋ニ成候とも雨少候而、

残炎難去候。

一岡山人罷出候而、大御面^{（た）}到奉懸候。前路ニ罷出候」

様申出候ニ付渡^{（た）}し置、帰路ニいたし候由帰而承、大ニ」

延引ニ成候事共、恐入候而叱候義ニ御坐候。御状も忝」

落手仕候。

一中元為御祝義、方金百足被贈下、御厚情」

深奉感謝候。近來、御世話申上候事も少」

御坐候所、不相替御厚御取向、甚痛入」

奉存候。

一『三のしるへ』の事、一昨年『道のしるへ』を早春ニ」

出候而、其後病身増候而打込置候所、近來は」

快方ニ而元氣を出し、『哥のしるへ』此間出来申候。此分」

大分出来宜候。次ニ『文のしるへ』を、来月中ニは書立」

可申と存申候。出来次第若州之妙玄寺へ」

見せ、詞ノ活キを正し、夫々上方へ出し、彫刻」

早速ニ為致候也。

一春門京江出候訳之事、是ハ御所司御家中ニ、」

同人ヲ信し候人御坐候而、大坂ニ而春門会ニ出候事」

御坐候。其人世話取、京ニ而連中ヲこしらへ候而、」

毎月出候と申事也。候ハ御城代ノ時も、同人ハ」

不召候。先候^{（さ）}は鈴ノ屋門ニ而、老拙も江戸ニ而は」

御懸意、近所板倉宿とも、御通行ニは出候処、」

今ノ候は、左程之御好ニ而は無之様子ニ承候。」

一御文章ノ数々、乍毎殊之外面白候。題作」

漸々御書被成候而、追而御文集被成置候而可然候。」

『松乃屋文後集』も、近々京江出し、板下ニ為懸候」

心得ニ御坐候。

右条々御報如此御坐候。 頓首

七月廿五日

尾張名護屋納屋町

清水太左衛門様

大坂迄は賁済夫々

京引受

〈戊八月廿二日着〉

藤井長門守

御報要用文稿入

一五 「文政十年」 正月四日付

改年之御慶申収候。大家被成御揃、弥御壮栄」

被成御越年、奉賀候。老拙無恙加馬年候条、」

御安全可被下候。右御祝辞申上度、如斯御坐候。」

猶期後信之時候。 恐惶謹言

正月四日

二陳去冬十一月之御状、昨三日ニ大坂へ到着、」

忝奉拝見候。浪華ニ滞候而如此遅く相届」

申候事ニ而、初察当ニ申遣候事ニて御ざ候。扱」

此節は神用と来客とにて、一向ニ無寸暇候上、

老衰寒ニ弱り、夜は病臥候様之事にて、

昨日之来着之状數十通、皆々急ニ加筆等は

出来かね候故、先御断之状ラ上ケ置候。此中頃ニ

御文章加筆候て、又々差出し可申候。」

一歳晚為御賀儀、金百疋被贈下、不浅」

奉感謝候。近來何之御世話も不申上候所、

如此御厚情之御取斗、恐入候事ニ御ざ候。」

一老拙事、近來至而多病、残生難保被存候ニ付、

来月は出立ニて京江登、大医ニ談し候積リニ

御ざ候。三月初々中頃迄ハ在京と被思召可被下候。」

嵐山ノ花も十日頃なるべし。旧冬ハ『三のしるべ』

書立申候^{みちのしるべ、哥のしるべ}文のしるべ也。『万葉新採百首』

解ノ補注も、あらまし書申候。

為御吊慰呈一書候。御家君様御事御疾」

来之处、種々御治療被尽候得共不被為」

叶、去秋御遠逝之由、奉驚歎候。御愁傷」

奉遠察候。右御悔申上度、如此御坐候。 恐惶謹言

正月四日

藤井長門守

清水君

一六 〔文政十年〕三月廿一日付

城戸方に御出し被成候御状、則同家ニ而拝見、

御文加筆いたし申候。乍毎面白奉存候。」

扱老拙上京は、唯医ニ示談之為ニ而、

早々帰申候。近來之病身、旅勞添候而、

気分悪候而、花も不面白、用耳取急候而、

引取申候事ニ御ざ候。夫故、御上京を得」

御待不申、残念無限候。御懇意中」

被御頼被成候由之文章は、右之仕合故、

此所ニ而は得認不申候。大抵之事ニ候ハ、

老病疲勞之趣ヲ以御断可被下候。」

若又、無下ニも難被成候御間柄之事ニ候ハ、

国々認候而可呈候。後便ニ承可申候。何分」

旅中は勞多、煩出し不申候内、早く帰」

申度差急候故、承及不申候御事ニ御坐候。」

御憐察可被下候。 頓首

三月廿一日 認置

尾張名護屋納屋町

清水太左衛門様

ちん先弘

京々御報申候

藤井長門守

一七 文政十年十二月廿六日

去月末之貴書此節相届拝見、益御壮」

栄奉賀候。老拙無恙候。歳晚為御賀儀」

御肴料一万金被贈下、御深情奉感」

謝候。御文稿加筆、御疑問御意書入候而」

御返し申候。且此頃読出候哥二首、短」

冊ニ認呈候。御慰ニ御覧可被下候。『松の落葉』

と号候隨筆もの、一ノ巻へ先年書候ニ付、今年」

二・三と書申候処、三ノ巻茂候而年暮申候。夫故之」

歳暮之哥ニ御坐候。右御礼御意迄、如此」

御座候。猶来春目出度可申承候。 頓首

十二月廿六日

二陳

来春二月中旬¹、出雲の大社へ詣候。国道²も」

兼々噂も在之、まだ一度も不詣候義にて存立」

申候。三月中へ彼地ニ居申べく候。四月帰候て、」

五月中ニは京江ちよと可參候。老拙痴痛故ニ、」

京医ノ薬五百貼斗のミ候へ共、今年も秋末³」

冬江懸候而五度も起候故、又相談ノ爲ニ出候也。」

御文通、右之御心得ニ候。

一白華と申もの罷出候由、先日來候而物語」

申候。御状今日遣し申候。

一『三のしるへ』ハ板下も出来揃、此節⁴京ニて」

彫刻ニ懸り申候。来年は出来可申候。

△子正月十四日着△

尾州名護屋なや町

備中宮内

清水太左衛門様

京迄は賁濟夫¹先私

奉復急用

藤井長門守

一八 文政十一年七月廿六日付

六月十日之貴書、本月十二日ニ相届候得共、」

殘炎烈不快、平臥ニ而御報今日ニ及申候。春中」

御不例之由、遠方故御様子存不申御不沙汰、」

乍然當時御壮栄、目出度奉存候。中元之」

為御賀義、方金百疋被贈下、不相替候」

御厚情深奉感謝候。御文辭一章加筆ニ而」

御返し申候。乍每奉感説候。白華方¹へ」

貴状早速相届、則御報書差出し申候。」

当春は、杵築詣哥四十首斗在之候故、」

『出雲路日記』と申もの一冊書出候。書林江渡」

彫刻為致候。右之中三首書出、御慰²ニ」

呈候。御報礼迄如此御坐候。 頓首

七月廿六日

尚々近來彫刻もの事、城戸³御聞」

被成候由、猶別番委書記し、入御覧候。

被成候由、猶別番委書記し、入御覧候。

被成候由、猶別番委書記し、入御覧候。

被成候由、猶別番委書記し、入御覧候。

太左衛門様

松 斎

著述彫刻之次第

『三のしるへ』道・哥・文 三冊 京ニ而彫立濟之由申來候。

『松乃屋文集後篇』

三冊 上中二巻、板下去年中ニ出

『松の落葉』

四冊

来、春の彫刻ニ懸候。下ノ巻板下迄今以來不申候。

一ノ巻板下、当正月ニ出来、彫刻ニ懸候。二・三ノ巻昨今板下書候取中、四ノ巻はいまだ不脱稿候。

『万葉新採百首解補注』四・五巻

これは老拙補注へ、去年書立候而京ノ大橋長広ニ渡、同人解ノ校正取中、且頭書いたし候也。長広ハ北方門人也。

『出雲路日記』

一冊

此節脱稿板下へ渡し可申候。来春迄ニハ出板為べし。

〈子八月廿日着〉

尾張名護屋納屋町

清水太左衛門様

質大坂迄は濟夫が先払 御報要用

備中宮内

藤井長門守

一九 文政十二年正月廿三日付

新年之御慶申取候。貴家御揃御壮」

榮被成御迎陽、奉賀候。弊屋無恙」

加犬年候条、御降念可被下候。扱去年十一月」

廿八日御日附之御状、今月中旬ニ相届候所、」

殊之外多忙之事御坐候而、御報及今日」

申候。右延着之訳は、去年十二月より此正月江懸西風吹通し、大坂の下り船」

無之候ニ付而也。乍延引御報左ニ申上候。」

一歳晚御賀儀之御肴料被贈下、」

御厚情不浅奉感謝候。」

一社江御備被成候御膳料、金百疋御越」

被下、御家運御長久之御祈念可申」

条表候。右取斗候。神簡供物等は、来」

月上京之節駕籠ノ棚ニ置候而、京迄」

持参り、同所御贈可申候。」

一鈴木氏著述『音声考』、愚序可認」

条承候。此書京之書林千楯方ニは」

可有候。一覽之上相考、京が不日可」

申上候。此主は、拙門之若狭義門法師と」

懇意ニ被申通候由ニ承居申候。」

一拙作『三のしるへ』三冊、彫刻出来揃候由」

京が申来候。同所ニ而校合いたし候へば、」

板本出し可申、無程御覽可被下候。」

右条々御報如此御坐候。委細は来月」

京が可申上候。 頓首

正月廿三日

京錦小路室町ノ西

惠比須屋市右衛門様

尾張名護屋納屋町

清水太左衛門様行 急要用

京迄賃濟夫々先私

藤井長門守

二〇 文政十二年三月十二日付

京着後、早々御文通可申と乍心懸、

種々急成事共御坐候而、及今日申候。

春暖催候所、弥御壮栄被成御起居候哉。

老拙無恙鐔舎ニ逗留、近来著述之

板下もの又は彫刻物、校合いたし居候也。

『三のしるへ』は摺本出来立申候。追々

御覽可被下候。『松屋文後集』は、上中二卷

彫刻出来、下ノ巻彫刻出来申候。『松の落

葉』は一ノ巻彫刻出来申候。老拙此度

上京と申勢ひにて、如此ニ御坐候。扱著

述ものゝ事ニ付、御相談御坐候而、別紙ニ申上候。

一先達而御家之御祈禱申候節、

神簡調候木は、神庫ニ御坐候子細有

木ニ而御坐候。備候もの少し相添、御贈

申候。竈殿直会と申ものゝ事ハ、追而

『松の落葉』ニ而御承知可被下候。

右申上度如此御坐候。恐々頓首

三月十二日

考出著述之事

近来数々仕立候処、京撰之書杯板下

彫刻之取計取急不申、老人氣はいれ、

此度千楯へ察当申聞候所、同人有躰ヲ内々

申出候は、御著述は世ニ被行候故ニ、追々ハ

御蔭を蒙候事ニ候へ共、家をこしらへ候

様成ものにて、取初仕入ニ物入多、何もかも

ひとつニ集候故ニ困り申候所が、遅々ニ及候と申候。

左様ニ候へ、仲間ヲかたらひ多勢ニ而取斗候而、

可□申聞候へば、其義組合之大坂河内屋

義助きらひ、しめ売ニいたし候了簡にてと

申候故、渡し置候書共ハ、今年年ニはいづれ

出来揃可申、此後ノ著述ヲ名護屋へ

渡し候てハ如何と申聞候所、随分左様被成候ハ、

永楽屋など引受候へ、勿論おも歩ニ入候而京地之

世話何にてても可仕、河義ヲも御加へ被成候而、

これも歩ニ入、大坂ノ世話可仕と申候。何卒

貴君が、右之訳御含ニ而、永楽屋江御内談

被下度候。『古今集新釈』四季ノ部、先年書

申候。追々これを仕立可申候哉。『余材』

『打聴』・『遠鏡』等之誤ヲ正し、哥ノ情とき

著候書ニ御坐候。此度出来候『三のしるへ』、近々

御覽之上、永楽屋へ御掛合可被下候。『哥のしるへ』ニ而

拙子古哥ノ解之様異成子細、顯然ニ御坐候。

右之段御含置、追々御内談可被下候。 頓首

三月十二日

『声音考』序之事

先般被仰下候鈴木主御著述之書ニ、

拙文之序加江候様ニとの事、此地ニ而

『声音考』拜見、妙玄寺義門も来り居候ニ付、

此仁ニも承^{声音之事共考出}不得^{年之義ニ}而如此申候へとも、

從來不学候筋之事ニ而腹ニ入兼候上、

大平子之序文御坐候上は、拙文ノ序文

加江候とて世間ノ受宜成候訳も無之候。」

此人は、本居家ヲ繼候仁故、中国・西国ニも

名高御坐候也。無詮義ニ御費も有之事、且

不案内之筋故、筆をも採兼候也。宜様

御断可被下候。 以上

三月十二日

〈丑三月十二日從京来〉

清水太左衛門様

藤井長門守

二 文政十二年三月廿五日付

本月廿日出之御返書相達、奉拜見候。」

御壮栄之御由奉賀候。老拙鐸舎ニ無

恙逗留、御安全可被下候。明後日ハ出立候而

帰候ニ付、一円と多忙、專要斗左ニ御意。」

一著述、永楽屋へ御相談被下候様ニと申上候は、

『古今集新釈』ニ而御坐候。其他種々仕懸も

御坐候へ共、老年ニ及候故、夫々出来候事は

無覚束、『古今集』ハ、天下ニ至宝といたし候もの、

此注釈、『余材』・『打聴』・『遠鏡』、皆古哥之

情をときえられず候故、此集の哥の

めてたき事、いまだ世ニ不頭候。此事

『三のしるへ』中ノ卷御覽被下候へば、御合点

まゐり申候。其上にて、永楽屋へハ御達

可被下候。急ぎ不申候。此集四季ノ部、

先年注釈書置候。夫ヲ取出し、全部

書立候志ニ御坐候。御地ノ人此間見え、

委く咄置候。御聞可被下候。此人、『三のしるへ』を

被持帰候筈也。

一御文稿加筆、御返し申上候。 頓首

三月廿五日

〈丑四月四日着〉

尾張名護屋納屋町

從京都

清水太左衛門様

藤井長門守

ちん先弘 急用

解説

九 浪華から約十ヶ月ぶりで帰郷、公私の用件を一応取片づけてから執筆したもの。

高尚の許に送った草稿が一向返却されて来ないので、宣昭も待ちくたびれていたろうが、高尚には高尚で、余儀ない事情もあり、いろいろ手違いもあったようだ。但馬守高豊の病氣は一進一退、長びいたらしく、それが高尚の心に暗い影を落していた。

1 高豊。

2 恵比須屋（城戸千桶）。

3 これも、講釈が前年から始まったことの証となる。

一〇 在京中の執筆。今度の上京は、高豊を伴って医療のためだったのだが、実は高豊の病氣もはかばかしくない。加うるに、高尚自身も頓に老衰を思うこと多く、今後はしばしば上京も期しがたいというので、いわばその挨拶の意味もあったようだ。「京地ニ而講席之とちめと心得申候」という言葉も、事実そう痛感していたのであろう。ただし高尚は、幸い健康を保つことができて、この後もしばしば京に上っている。

1 書簡二、注2。

2 村田春門。通称九二兵衛、字玄仲。はじめ一柳並樹、のち春門。別号、田鶴廬舎・蟹守・楽前・郁子園。伊勢白子の人。鈴屋門。中年江戸に出て、遠州浜松城主水野侯に出仕、のち浪華に帰る、船越町に住して門生に教授。天保七年（一八三六）十一月廿四日没。七十二歳。茶臼山邦福寺に葬る。編著、『独話小録』『客話小録』『田鶴廬舎隨筆』『蟹守家集』等。

3 尾崎雅嘉。通称俊蔵（春蔵とも）。字有魚。号、蘿月庵・春陽軒・華陽・春の屋・博古知今堂。大阪の人。始め医を業とした

が、のち学業に専念。博学多識、国学・歌学・漢学に通じ、学ぶものが多かった。文政十年（一八二七）十月三日没。七十三歳。口繩坂春陽軒に葬る。編著、『続異称日本伝』『群書一覽』『蘿月庵国書漫抄』『古今集鄙言』『百人一首一夕話』『和歌呉竹集』『和歌枕詞補註』『増補和歌明題部類』『続和歌明題部類』『増補松葉名所和歌集』『新松葉名所和歌集』等。

一一 高尚は、老来疝痛に悩み、終疾は中風だったらしいが、この年の病は何であったか。年次は、「源語之分、是ニ而済候哉、昨今年ハ京撰に出入」「もはや京撰に出候志も退候処」などところから、前簡一〇・一一に次ぐものと思われる。

1 未刊。稿本、『藤井高尚家集』四（春夏・冬・雑上・雑下）、『藤井高尚家集恋部』一・『藤井高尚自撰家集四季』一等があるが、いずれも自筆ではない。

2 河内屋儀助か。

3 『文集後集』上、竹庵詞「家の西にさゝやかなる庵づくりす。

……庵の南の窓の前に竹を植ゑ茂らせたり。……かく竹をあまた植ゑつれば、おのづから庵の名ともなりぬとぞ。」

4 カヘデノソノ。同、「同じ宮の郷の内ながら、松の屋とは離れて吉野町といふ町の東、普賢院といふ寺の北隣に、おのがなりどころを作れり。……かへでの園とぞいふ。しか云ふ故は、かへでの木数をつくして植ゑつればなり。……文化十とせあまり一とせといひし年の冬うゑたてて……。」

一二 在浪華筆。短い文面の中に、老いて子を失った悲しみが、滲み出ている。保養のため浪華へ出たというのも、どうにも耐え難い悲しみを、せめては紛わそうとしたためであろう。

1 但馬守従五位下大中臣藤井宿禰高豊(墓碑)。文政八年(一八二五)二月十二日没。三十五歳『文後集』中、もとのしづく、「うせにし高豊は……おのれも妻もいといとかなしうしつゝおほし立てたる独子になんありける。」高尚には、妾腹に二女があったが、男子は高豊のみ。家集、稿本『小松の落葉』(岡山図書館) 二六十二歳。

一三 年次は、表書に、「酉極月廿六日着」とあるので確定。

1 疝痛か。

2 鈴木胤。通称常介、字叔清。号、離屋。名古屋の人。幼にして經史に通じたという。廿九歳宣長に入門。卅二歳、御近習組同心として尾張藩に出仕、傍ら儒学を門生に授ける。天保四年(七十歳)、明倫堂教授並仰付けられ、『書紀』・『古今集』等を講じた。同八年六月六日没。七十四歳。通稱院離山淨達居士。編著、『雅語音声考』付録に、

離屋鈴木先生著述書目

四学雜錄 文学 行学 忠学 信学

離居說書說

詩書易左伝礼記論語孟子荀子史記國語老
子莊子韓非呂覽淮南源氏物語古事記万葉集

鈴屋諸書

離屋學訓

離屋集

玉小櫛補遺

源氏物語説

大学参解 已刻

論語参解

雅語音声考 已刻

言語四種論

医事厄言

德行五類図説

と出るが、他にも、『少女巻抄注』等。稿本、『離屋文稿』・『離屋歌稿』等。岡田稔・市橋鐸編『鈴木胤』(昭和四二)参照。

3 一冊。文政七年、玉華堂刊。

4 義門。

一四 在宮内筆。城戸千櫛が下阪したついでに托したもの。当面の用件としては病氣見舞と中元の謝儀だが、『三のしるべ』の成立過程を述べている点など、注意される。春門評は書簡一〇にもあった。同門だが反りも合わなかったのか、多分に軽視していたようだ。

1 老父。↓次簡一五。

2 草稿であろう。

3 『三のしるべ』、とりすべていふ事、「を」としる春道のしるべといふものをかきあらはして、ことし又哥のしるべ・文のしるべとふたつものせしをとりしたためて、三のしるべとなし、すなはち書の名としてひとつのさうしいできにけり」(文政九年秋、自序)。ただし出版は遅れて、文政十一年。

4 京都所司代松平周防守康任。康定の子。文政五年十一月大坂城代、同八年四月廿四日所司代。

5 石州浜田城主松平周防守康定。奏者番兼寺社奉行。国学を好み、深く宣長に私淑、藩老岡田頼母藩儒小篠敏をその門に学ばしめた。『玉の小櫛』刊行は、その志に出る。著書『万葉八重疊』。文政四年三月廿二日没。六十一歳。

6 三冊。大橋長広序(文政一〇)。天保三年四月刊。

一五 在宮内筆。前日落手した宣昭書簡に対する返信の意も含めて認めたものだが、同日に二通認めている。改年の賀詞と弔問を区別するための配慮からか。前簡で八月ごろと予定していた『三のしらべ』の脱稿は、予定より遅れたものと見える。「補注」は、大體脱稿していたらしいが未刊。

1 賀茂真淵著。三巻。『万葉集』の歌百首を抜き、四季以下に分類、注解批評を加えたもの。刊本には誤脱がある。

一六 在京筆。前簡に記したように、医師の診療を受けるため上京したのである。帰宅を急ぐのも心細かったからであろう。

一七 在宮内筆。歳晚賀儀の礼状を主としたものだが、併せて近況を報じている。来春出雲大社参詣のことも予定している。「老拙痼痛故ニ、京医ノ薬五百貼斗のミ候へ共云々」というので、痼疾に悩んでいたさまもうかがえる。

1 ↓次簡一八。

2 同。

3 岩月白華。備中の人。天保六年正月十八日には、真野守貞八十歳

・河本宣易七十六歳・藤井高尚七十二歳・岩月白華七十歳・藤井高俊六十九歳・藤井重政六十六歳・堀家常定六十五歳、以上七名が中山の麓高俊の家に会して尚齒会を行なったという(中山寛『中山尚齒会』)。

一八 在宮内筆。中元の謝儀に併せて、旁々近況を報じたもの。「著述彫刻之次第」も参考になる。年次は、文中、当春杵築詣のことがあり、また表書に「子八日着」と付記するので明らか。

1 前簡一七。

2 この旅、二月廿一日出発、三月十二日帰着。

3 『享保大坂出版書籍目録』に、「三のしらべ 一冊 作者藤井松斎 板元塩屋長兵衛 出願文政十一年八月 許可文政十一年九月十七日。」

4 随筆。同「松の落葉 五冊 作者藤井松斎 蔵板主右同人 売弘塩屋吉兵衛 出願天保二年十一月 再願天保三年六月 許可天保三年十二月。」『百家説林統編 上』所収。

5 通称九右衛門。柿園。大平門(「藤垣内教子名簿」)。はじめ北方(富士谷成章)門。嘉永四年三月五日没。六十四歳。編著、『武蔵演路』・『東山道地誌』等。鐔舎主唱の一人。

6 『享保大坂出版書籍目録』に、「出雲路日記 一冊 作者藤井松斎 板元塩屋長兵衛 出願文政十二年十月 許可文政十三年二月七日。」

一九 在宮内筆。歳晚賀儀の礼状。表書に「巳丑二月卅日着」と

ある。

鈴木胤の『雅語音声考』序文は、宣昭を介して依頼され、本簡では一旦承諾したが、次簡では断っている。

1 雅語音声考。一冊（「希雅」と合本）。本居大平序（文化十三年九月）。『鈴木胤』年譜には、文化十三年刊とする。

二〇 在京筆。高尚の上京は、前便でも予定を報じていたが、たぶん二月中だったろう。書簡三の「小屋」はすでに引払っていたので、宿舎は鐺屋に定めたのである。年次は付記に「丑三月十二日従京来」とあるので確定できる。

用件は二三あったが、特に大事な件は、名古屋の書肆永楽屋に出版の瀬踏みをして貰うことだった。

高尚の著述は、従来主として大阪河内屋饒助などを板元としていたが、それが、近來数々仕立したにも拘らず、京撰の書林では一向仕事に取りかからうとしない。何点かの書物を刊行していてさえ、いざ新しいものとなると、なかなか思うようには行かないのである。学究としての著者と、算盤を第一にする書肆とでは、考え方が一致しないのも当然であろう。高尚はいらいらしていた。むしろ高尚の方が世事に疎いのかも知れないが、とにかく、名古屋の永楽あたり、引受けてはくれまいかと思う。千橋に相談すると、河饒と全く手を切るわけにもゆくまいが、それもよからうと賛成してくれた。このころから高尚は、河饒に対もる不信感をだんだん募らせていったようだ。だが永楽屋との話合も、いろいろ難航する。そして『古今集新釈』は、生前ついに陽の目

を見ることがなかったのである。

1 『松の落葉』三、「わが大神の御饌たく竈殿の直会といふ米の事」。

2 名古屋出版書肆永楽屋東四郎。

3 河内屋饒助。

4 ↓書簡二・三等。

5 『古今余材抄』。十卷。契沖著。元禄五年成。『古今集』新注の最初。

6 『古今和歌集打聴』。真淵講述。野村ともひ子筆記、上田秋成、修訂。寛政元年刊。

7 『古今集遺鏡』。六卷。宣長著。寛政九年刊。

8 ↓前簡一九。

9 本居大平。もと稲掛氏。通称三四右衛門。号、藤垣内。伊勢松坂生。宣長の門に入り、その養子となる。紀州侯に仕えて、屢々松坂と和歌山の間を往復した。性温厚、宣長学を大成普及せしめた。業を乞うもの千余人という。天保四年（一八三三）九月十一日、和歌山に没。七十八歳。

10 「文化十三年九月十五日 本居大平」。

二一 在京筆。帰国を前にしての執筆である。前簡で『古今集新釈』の出版につき依頼したばかりだが、まだ意を尽くさなかったと思つてか、重ねて念を押している。永楽屋への交渉は、「急不申候」とは言っているが、内心焦つてもいたようである。六十六歳という年齢、前年重病を患ったことなどが、しぜんそうした心境を促したのであろう。